放生津の歴史と風景を失わないために。

署名のご協力をお願いいたします。

残したい、守りたい、ふるさと放生津の風景

放生津は、古くから海人の大集落が形成され、万葉の頃には大伴家持、南北朝動乱の頃には後醍醐天皇の皇子宗良親王、室町期には将軍足利義材がこの地に足跡を残しています。そして江戸期には、加賀藩の年貢米を大阪へ廻送する、放生津の船乗りたちが大活躍するようになり、「放生津」の名は日本海から瀬戸内、そして北海道の各地の湊に知られるようになります。これが「北前船」です。

加賀の銭屋五兵衛と並び称せられた北前船主・放生津綿屋宮林家は、天正年間に砺波から放生津へと移り住み、令和の現在で 400 余年の時を放生津で過ごしました。幾時代を超え、災害、戦禍を逃れ、江戸時代末期の姿そのままに今日まで繋ぐことができたのは、ただただ幸運としか言えません。しかし、残念ながら今や自力でその歴史と風景を保存していくことが出来なくなりました。このまま放生津の歴史と風景を失っていいのだろうかと、ずっと考えてきました。地域の近代の歴史がこの場所には詰まっており、江戸期の石組み、石積み、屋敷、庭、水路…、維新前後の近代地方史、海運史、漁業史の足あとの全てをこのまま失っていいのか……

放生津には、海からもたらされた独自の食文化や民俗風習があり、漁業、農業、そして、加賀藩の文化と財政を下支えした歴史と誇りがあります。その歴史とともに放生津の風景を後世へ残したい。その為に、同じ気持ちを持つ方々の声を集める必要があります。そして、この声を持って、保存にご協力いただける企業・団体様へお願いに上がりたいと考えています。

放生津の歴史と風景の保存への道を開くために、ご賛同いただける皆様の署名のご協力をお願い申し上げます。（ご署名はこちらから）

2024 年 2 月吉日

呼びかけ人：堀井 泰子　放生津綿屋 宮林彦九郎 16 代長女

Yasuko Horii　16th generation Hikokuro Miyabayashi

English Page here

綿屋彦九郎 沿革

宮林家（以下、綿屋宮林）は、漁具を編むための藁や縄など藁工品を砺波から放生津へ供給しており、天正の大地震（1586 年）を機に、砺波の宮村から放生津へ移住したと伝えられています。

その後、網元となり漁場経営に着手、さらに加賀藩の方針転換により自船所有が認められ、廻船業へも乗り出し、藩米の輸送を担うようになりました。

北海道と瀬戸内海経由で大坂を結ぶ北前船交易で成功し、加賀藩の御用商人、銭屋五兵衛と並び、加賀藩の調達金に応じて、後の北陸銀行の前身、第十二国立銀行の創設家の一角となりました。（木谷藤右衛門、島崎徳兵衛、能登屋三右衛門、綿屋彦九郎）

加賀藩から綿の納入を一手に任されていたことなどから、深く藩の台所と結びついていたと思われ、明治維新後、最後の加賀藩主・前田慶寧公の四女、慰子姫を、幼少のある時期に預かることとなり、当家の総檜の奥の間は、姫君御養育の為に造作されたと伝えられています。

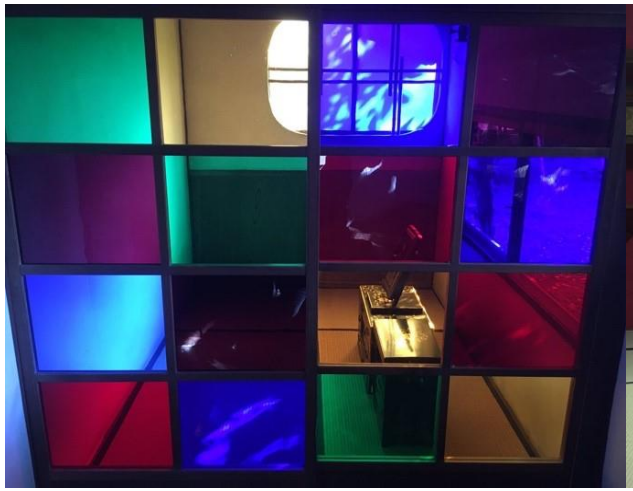
東西約６０m、南北約 70mの綿屋宮林邸には、海から直接船が蔵に横付けできるよう、かつては屋敷の周囲に堀がめぐらされおり、現在もその姿の一端を目にすることができます。

綿屋宮林邸の現在

昭和 45 年前後に重要文化財指定候補に伏木の武田家とともに選定されたものの、18 世紀の農家の姿をそのままに残す武田家住宅が県指定重要文化材に決定しました。当家は登録有形文化財には登録していません。

文化財は原則、所有者がその保存に努めると文化庁の指針で示されておりますが、広大な敷地に伴う固定資産税、相続税の税の圧迫に加え、連帯保証人となっていた親族の経営する会社の倒産に直面しており、所有者自身での保存が困難な状況にあります。

2021 年年末　債権者から抵当権設定の話が出て射水市に相談→
2022 年春　外国人ホテル経営者への売却の話が射水市より持ち込まれる→
2022 年夏　夏野市長、外国人ホテル経営者一行来訪→
2022 年秋～　建築士、米国人投資家来訪→
2023 年夏　東京の不動産会社一行来訪→



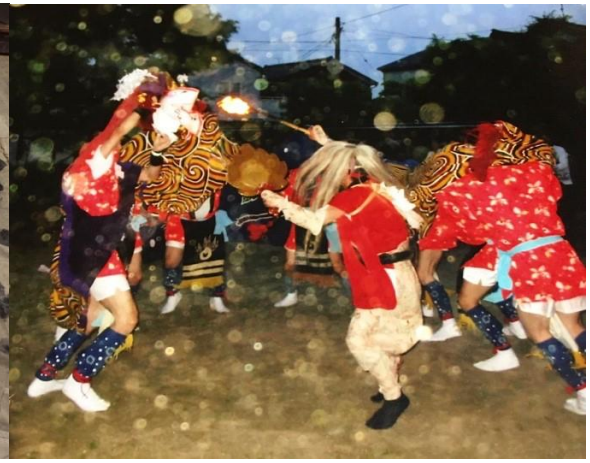
残したい、守りたい、射水放生津の風景

放生津は、古くより射水平野の米の集積地であり越中の中核を担った湊でしたが、海岸の浸食により沿岸の風景も一変し、かつては川や水路が幾筋とあった町の景色も今ではほとんど失われてしまいました。現在は、内川と綿屋宮林家の周囲の堀に、その水路の面影をわずかに見ることができます。これは、郷土の歴史を後世に伝えるために絶対に残すべき風景であると考えます。

江戸から明治への時代の大変革期、旧加賀藩領の政治、経済も大混乱な状況下にありました。その時代の越中において、その改革の一翼を担ったのが、伏木の能登屋藤井能三と放生津綿屋宮林彦九郎でした。放生津における文明開化期の歴史のほぼ全てを綿屋はその身にまとっています。

この度、「放生津八幡宮の曳山・築山行事」が、国重要無形民俗文化財に指定されました。故郷の伝統を長きにわたって大切に守り続けてこられたその思いには敬服するばかりです。伝統的な獅子舞もあります。獅子舞を愛してやまない青年がこう話してくれました。「舞っていると、先祖と一体になれる感覚があるんです。だからやめられないんです」

歴史や伝統を後世に残す意味はここにあると思います。文化的遺産により過去を知り、先人の心を知ることで郷土愛が育まれ、地域社会に奉仕する気持ちが生まれます。



Help us Preserve and Protect the Legacy of Hōjyōzu

From the1700s to the early 1900s, Kitamae-bune merchant ships sailed up and down the Japan Sea coast trading domestic goods, stimulating the nation's economy and cultures. Their legacy endures today, as black-tiled, wood-paneled warehouses and merchant residences.

One former port of call, the Hōjyōzu harbor nestled in Toyama Bay, was established in the 14th century, its splendid beaches hailed in a waka poem as early as the 8th century. Hōjyōzu derives its name from the Hōjyōe (Releasing Life) festival celebrated at the local Shinto shrine, where locals express their gratitude to all the living creatures that sustain them by returning part of their catch to the ponds, fields and seas.

The Kitamae-bune merchant Miyabayashi family has been blessed with the good fortune to continuously inhabit the Hōjyōzu residential compound they built 180 years ago. Their descendants still live there, hosting local festivals and events without the support of the public funding Designated Cultural Properties receive. But the earthquake that devastated the Noto Peninsula region on January 1st, 2024, has imperiled the family's business along with their ability to preserve the history and culture it has sustained for centuries.

Their ancestral grounds epitomize the region's former glory, from its centuries-old stone masonry and arranged boulders to the mansion, gardens and waterways, along with histories of the area's sea trade and fishing industry. Hōjyōzu boasts distinct food cultures and local traditions steeped in the bounty of the nearby sea, along with the legacy and pride of the Kaga clan that once ruled the Noto region. The family hopes to preserve these histories and Hōjyōzu's landscape, to pass it on to the future. But recent events mean they can no longer protect that heritage on their own. Please sign the petition to support their efforts as they search for a way to preserve and protect this irreplaceable legacy. Hikokuro Miyabayashi

Hōjyōzu (Imizu, Toyama Prefecture today)

The Hachiman Shrine

The Miyabayashi Residence